

中村共同体論と村落研究

三溝 博之

前近代社会をその対象とする歴史研究（構造分析）において、フレーム・ワークとしての「共同体論」（あるいは農村社会研究における「村落共同体論」）の有効性とその研究史上の意義については、これまでさまざまな形で議論されてきた。本報告は、その中において独自の視点と問題意識を持って展開された中村吉治の共同体論について、並行して行われた実態調査を基礎とする村落研究との関連において、再検討しようとするものである。

村落研究において、「当の村落をどうイメージするのか」（＝村落の原風景）は研究の初発においても、また最終目的でもあるその歴史研究あるいは構造分析においても重要な問題となる。中村吉治においては信州上伊那郡朝日村平出（現長野県上伊那郡辰野町）、この旧伊那街道沿いの宿場での生活が、その原点にあったと考えられ

る。生家の通称を「引っ込み屋の古い新屋」と呼びならわされるような集落内部の社会関係や同族内での家族関係の体験が、大学での農民史への傾倒から最晩年にいたる八十余年の生涯にわたって、村落やそこに生きる人々の生活に対する深い関心の、おそらくは源泉であったであろう。(この点については遺稿集『社会史への歩み』全四巻、特にそのうちの第一巻『老閑堂追憶記』刀水書房、一九八八年参照)。

一方、中村が村落研究をベースにした社会史へと自らの研究を収斂させていった背景には郷土への思いも去ることながら、郷土の先輩である有賀喜左衛門の影響には計り知れないものがあつた。学問への動機付けばかりでなく、その共同体論形成にも重要な意味を持つた。(この場合、有賀同族団論との学的継承関係、相互比較は中村共同体論形成の問題を解く大きな鍵となるものであるが、その点は後日を期したい。)また村落研究と密接な関係を持つ民俗学(柳田国男や折口信夫)への関心も有賀に触発されたことであつた。このように中村共同体論にとって村落研究の持つ意味は従来の単純な理論と実証の因果律を超えてより深いところから問い直されなければならぬと考へる。

中村が村落にこだわり続けたのは前述したように、自ら生まれ育つた集落の原風景(II)やがてそこから出ていかなければならなかつた自己との対比)と無縁ではありえない。しかし、学問研究の対象としての村落はそういった個別的なこだわりを超えて、根源的な、あるいは一般的な村落社会のあり方へとつながっていく。前近代社会を規定する社会構造の分析を、二つの総合的な村落の実態調査を踏まえて展開した中村の学問的成果にはまだまだ学ぶべき点が多

多いといわなければならぬだろう。